

実践報告

幼児への読み聞かせ～ボランティア「青い鳥」の活動から～

Reading Stories to Children - The Report of Reading Volunteers “Aoitōri”

三浦文恵

要約 本報告は2004年に八戸市で発足した読み聞かせボランティア団体「青い鳥」の活動のうち、幼児を対象とした読み聞かせ活動をまとめたものである。発足当初は幼稚園や児童クラブ、小学校等公共施設での活動が主であったが、読み聞かせの重要性が認識されていくのに伴い、民間施設やイベント等でのニーズも高まってきた。また、少子化に加え会員の高齢化、感染症対応に伴う活動の変化等社会状況に応じて活動も変化してきている。今後も地域社会での読み聞かせを継続していくにあたり、これまでの活動を振り返り、課題と成果を検証する。

1 はじめに

この実践報告は、主に八戸市内で活動する八戸市読み聞かせボランティア「青い鳥」の代表を務める筆者が、団体として、また個人として行った読み聞かせおよび関連する活動のうち、幼児に関わる活動をまとめた記録である。

2 活動団体「青い鳥」について

八戸市読み聞かせボランティア「青い鳥」は、八戸市教育委員会が2001年度にスタートさせた教育支援ボランティア制度に登録した市内の退職教員を中心に2004年9月に発足した。この教育支援ボランティア制度は、八戸市内の小学校での教育活動の支援業務にボランティアが派遣され業務に従事するというもので、令和2年3月31日迄運用され、その後は「第2期八戸市教育振興基本計画」の地域密着型教育推進事業として、学校・家庭・地域社会が連携し学校コーディネーターの調整のもとで現在も継続されている⁽¹⁾。八戸市では、市政運営の基本となる八戸市総合計画のうち、重点的に推進すべきまちづくり

戦略の一つとして「本のまち八戸」の推進を位置付けており⁽²⁾、八戸市内小学校でのボランティアは、本の読み聞かせや図書室の環境整備等、本に関する活動が多いことが特徴である⁽¹⁾。この学校支援ボランティアとして図書活動や読み聞かせ等を行う学校ボランティアの中から、もっと活動の場を広げ自由な形で子どもの言葉や読書活動に関わりたいとの声が上がリ、八戸市の教育支援ボランティア登録を継続したままで、新たに独立した読み聞かせ団体「青い鳥」を設立した。

初代代表が小学校を定年退職した国語科教員であったため、設立当初は八戸市内の公立小学校が主に読み聞かせ活動の場であった。その後、次第に活動の機会を増やし、筆者が2代目代表となってからは、大型商業施設での定期読み聞かせ、地元ケーブルテレビである八戸テレビ放送の読み聞かせ番組「青い鳥お話はこんできたよ」出演、各種イベントでのステージ発表等を行い、会員募集や活動周知に努めている。現在の会員は20名で、平日は主に幼稚園・小学校・公民館の児童クラブ等での出前読み聞かせ、週末は商業施設や各

種イベント等での読み聞かせや紙芝居披露を行っている。

3 活動内容

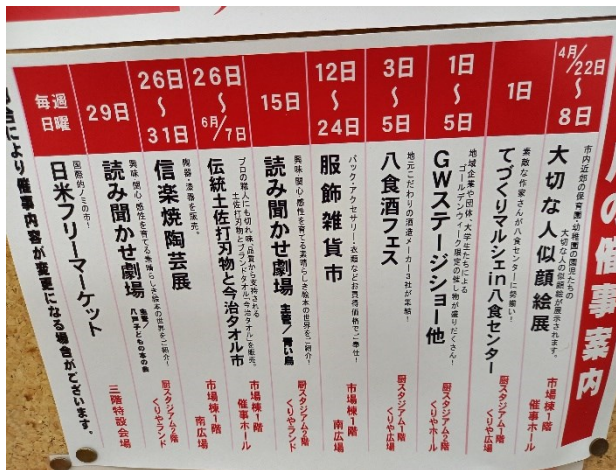
(1)八食センター内くりやランドでの定期読み聞かせ

八食センターは、八戸港近くのむつ湊地区で魚介・海鮮食材を扱う小売業者が集団で八戸駅近くに移転し、1980年に新たにオープンした郊外型大型食品市場である⁽³⁾。

1997年にリニューアルされた際、食堂棟として新設された「厨スタジアム」2階をイベントや子どもの遊び場として整備し、「くりやランド」と称して子どもの遊具等を設置し開放した。この一画を子どもへの読み聞かせスペースとして、床にマットレスを敷き、大型絵本や紙芝居を載せる台や本棚を設置して、2005年9月より毎月2回第2第4日曜日に「八食読み聞かせ劇場」と称して、「青い鳥」を含む市内2団体が無料の読み聞かせを行っていた。

在は再び「厨スタジアム」2階に移動している。

その以前と同じスペースに2021年、有料の幼児用遊技場「くりやランド」が新設された。対象は小学2年生までで、料金は45分入れ替え制で子ども1人¥500、無料で入会できる「くりやランド」会員になれば¥300で利用できる⁽⁴⁾。新たに有料屋内プレイグラウンドとしてリニューアルされた「くりやランド」には、大型遊具が設置されたのに加え、子どもが壁に配置された突起をつかんで登るキッズクリフ、授乳室やおむつ替えスペースを有する乳児用エリア等が設けられ、乳児エリア内に整備された畳コーナーで、毎月絵本の読み聞かせや紙芝居の披露を行っている。



＜八食センターの催事案内＞

その後、東北新幹線八戸駅開業による集客増加、東日本大震災の影響による観光客減少等で、場所を一時鮮魚を扱う市場棟2階のゲームセンター「わんぱく広場」脇の研修室に移動して実施していたが、閉鎖された部屋の中での開催であったため利用者が少なく、現



＜八食センター「くりやランド」で紙芝居＞

八食センターでの読み聞かせは、親が買い物をしている間の時間を利用して子どもに本を読み聞かせるケースが多く、付き添いであるもう片方の親や祖父母といった保護者の参加も多かったのが特徴である。そのため、親同士が知り合いになったり、新しい絵本の情報交換を行ったりして、子どもだけでなく大人同士の交流も盛んであった。しかし2021年に新設された有料の「くりやランド」では、新型コロナウイルス感染防止のため45分の利用時間制限と各回入れ替え制で消毒時間10分が設けられたため、大型遊具が設置された

館内では同じ制限時間内では遊具の方が子どもの利用度が高く、読み聞かせを利用するのは授乳ルームを利用する乳児やその兄弟を連れてきた若い家族に限られてきている。これにより読み聞かせる絵本も、物語絵本よりは単純な乳幼児向け絵本の方が喜ばれる。

八食センターでの読み聞かせ時に使用する絵本は、開始当初より八食センター敷地内で営業する伊吉書院西店の後援により提供されている。大型絵本は大きさも重量もあり持参の手間が省け助かっているが、施設が有料になってからの利用者の低年齢化と1回あたりの利用人数の減少で、大型絵本より小型の個人向け絵本の方が使用頻度が高く、こちらは「青い鳥」や会員の個人所有の絵本を持参し使用している。

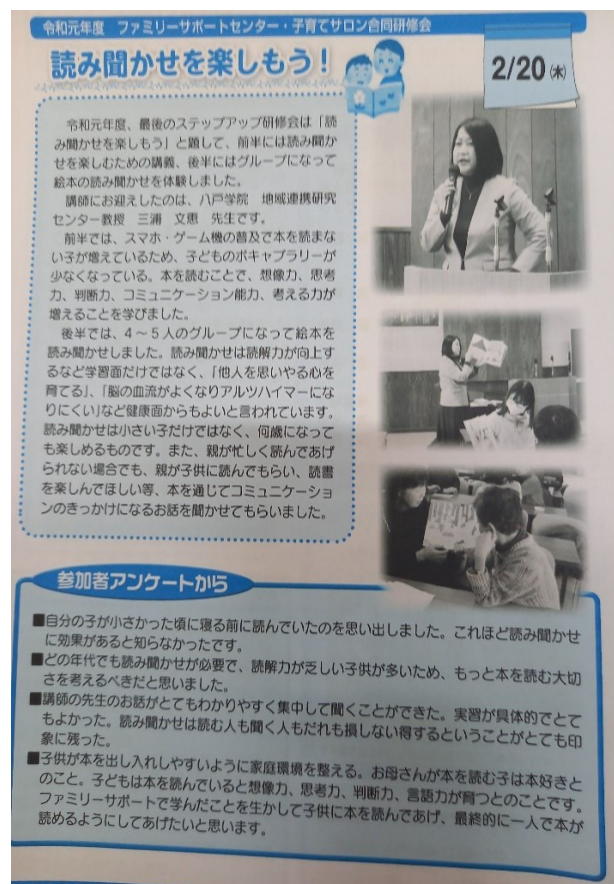
(2) 子育てサロンでの読み聞かせ指導

社会福祉法人八戸市社会福祉協議会内の八戸市ファミリーサポートセンター及び子育てサロンでは、子育てをテーマに毎年合同の研修会を開催しており、筆者はこれまでに数回に渡り家庭での読み聞かせの意義や実施方法について指導してきた。

2019年度の研修会では、スマホやゲーム機の普及で本を読まない子どもが増えている実情を踏まえ、健康やコミュニケーション力への影響について述べた後、参加者を数人の小グループに分けお互いに読み聞かせをしてもらった。読み聞かせは聴く方にも読む方にも双方にメリットがあると説明し、筆者が持参した読み聞かせ用の絵本の中から好きな本を自由に選んで挑戦してもらった。

参加者からは、読み聞かせの効能を再確認した、実践で読み聞かせをし合って参考になった、本に親しむための家庭環境の整備法や時間がない時の読み聞かせをどうするかの話がよかった等の感想があった。参加者の多くが「自分の声は読み聞かせに向いていない」「子どもを引き付ける読みができない」等、

普段の読み聞かせに自信がないとの声があがっていたが、声の良しあしは関係なく、子どもや親が好きな本を好きなように読むのが良い、と家庭で気軽にチャレンジし継続することをアドバイスした。



< 研修会の様子を掲載した広報誌 >

(3) 八戸市ブックスタート事業への協力

八戸市は 2014 年より、市民が様々な本に親しむ施策「本のまち八戸」を掲げ、その中の1つとして「ブックスタート」事業を開始した。

ブックスタートは、1992年にイギリスで始まった絵本と読み聞かせの体験をセットでプレゼントする自治体の事業で、2023年1月現在で全国では1741中1101自治体、青森県では40中八戸市をはじめ23自治体を実施している。絵本の配布のみを行う自治体も含めると、全国で1426自治体、青森県内でも32自治体が行っている⁽⁵⁾。

八戸市のブックスタート事業は、2014年開始当初より八戸市図書館が窓口となり絵本の贈呈、読み聞かせを市内の読書・読み聞かせ3団体が週替わりで担当していて、「青い鳥」も開始当初より読み聞かせを行っている。



<八戸市健診センターでのブックスタート>

上：「青い鳥」会員の読み聞かせ

下：ゼミ学生の読み聞かせ

八戸市の場合、毎週水曜日午後1時半から行われる八戸市総合健診センターでの股関節脱臼検診終了後に、ボランティア数人が手分けして訪れた親子に絵本の読み聞かせを行い、絵本1冊と図書館利用案内やお奨めブックリスト等が入ったトートバッグを図書館職員が親に渡す。贈呈する絵本は松谷みよ子作「いないいないばあ」だが、既に所有している場合は、まついのりこ作「じゃあじゃあびりび

り」、平山和子作「くだもの」等他の数種類の絵本の中から好きな本を選んでもらう。

2020~2021年度はコロナ感染防止のため読み聞かせを頻繁に中止していた時期があり、再開後も感染予防を理由に絵本の受け取りのみを希望するケースが増えた。また、コロナ以前は検診を終えた親子2,3組をまとめてボランティア1人が同時に読み聞かせを行う時もあったが、感染拡大後は読み聞かせを再開した後も1人1組を徹底している。

学生のゼミナール活動の一環として、希望に応じて筆者のゼミナール学生を毎年参加させており、今年度も3回参加させた。人と対面で話すのが苦手な学生が多く、最初はボランティアが読み聞かせる様子を見学させ、その後アドバイスをしながら徐々に読み聞かせを行うようにした。参加した学生たちは、「読み聞かせはハードルが高く自信がなかったが、いざやってみるとうまくできて楽しかった。」「赤ちゃんがかわいくて絵本で笑ってくれたのでまたやってみたい。」等、前向きな感想を述べていた。若い父親・母親と子育てについて言葉を交わしたり、付き添いの幼い兄弟にも読み聞かせたりして、学生自身が将来親となった時のための良い体験となっていたようだ。

(4)その他の活動



<イベントでのステージ読み聞かせ>

八戸市内を中心に、各種施設や青森県内のイベント等でも読み聞かせ・紙芝居披露・群読等を行っている。これまでに参加した主なイベントは、青森県立美術館「こどもおはなしフェスタ」、八戸市「子どもフェスタ」、「ブックフェスティバル」、八戸市社会福祉協議会「市民・ボランティア活動フェスティバル」、八戸公会堂「パフォーマンス劇場」、八戸市観光交流施設はっち「七夕おはなし会」「クリスマスおはなし会」等である。



<はっちでのおはなし会>



<小学校での朝の読み聞かせ>

出前読み聞かせを行っているのは、八戸市内7小学校の朝の読書タイム、公民館、幼稚園等での読み聞かせである。出前読み聞かせの時は、担当者1人がそのままの生声で1クラスに対し絵本を読むが、イベントで大人数

に向けてのステージ発表の時は音響機器を使用し、マイクで朗読・読み聞かせ・群読、効果音・BGM音楽の使用、背景に関連画像を投影する等の工夫をして観客に披露している。

4 会員のスキルアップ

「青い鳥」では設立当初から、会員の読み聞かせ・音読スキル向上と維持に重点を置き、定期的に研修を行っている。



<朗読講座での研修の様子>

読み聞かせは単独で行うことがほとんどだが、状況や生徒の人数に応じて2クラス合同で行うよう求められたり、その場で読んでほしいと本をリクエストされることもあるため、クラス全体に通る程度の声量や臨機応変に読み聞かせるスキルを身に付けている方が望ましい。また大人数で行う群読は、役に応じて台詞を1人で言う場面、何人かで声やタイミングを合わせて言う場面があり、いずれの場合も発声の基礎が重要である。会員自身もしっかりした基礎を身に付ければ声が出やすいように読めることを実感しており、研修を望む声当初から多かった。そのため、「青い鳥」発足直後は総会やイベント出演打ち合わせのタイミング等で研修を行っていたが、筆者がNHK八戸文化センターで朗読講座を開講してその講座の受講をほとんどの会員が希望したことから、以後はその朗読講座

内で呼吸・発声・活舌等の基礎スキルと朗読・音読の表現力を毎月2回継続して磨いている。NHK 八戸文化センターとしての朗読講座は施設の閉鎖に伴い2019年で終了しているが、引き続き市内の公共施設において「青い鳥」会員以外の一般市民にも朗読・音読・読み聞かせスキル習得を中心に講座を開放し、現在も継続して開催している。

5 課題と考察

(1) 会員不足と高齢化

現在「青い鳥」の会員は全員50代以上で多くは70代、主婦や退職者が中心で最高齢は88歳と高齢化が進んでいる。そのため、会員自身の健康問題に加え、家族の介護や孫の世話等家事の都合で活動や研修を休止・退会せざるを得ない状況が増えてきている。1人の担当を別の1人が代わりに行う程度の交代であればまだ可能だが、小学校での読み聞かせは始業前に全学年全クラス一斉に同時に行うため、複数の会員が既に他のクラス担当に入っている場合は代替がきかない。コロナやインフルエンザ等の感染症で複数人が同時に交代せざるを得ない状況になると、登録ボランティア数が多い団体として担当を割り振られるケースが多い「青い鳥」は、代替要員確保が難しくなっている。

会員数確保のためイベント等への出演を増やしたいところだが、コロナによるイベントの相次ぐ中止もあり、効果的な募集には至っていない。また会員のほとんどが「青い鳥」設立当初からの継続会員で、相互関係が非常に良好であるのは活動継続に大きなメリットであるが、それがそのまま会の高齢化にも繋がっている。

(2) 活動及び研修時間の確保

読み聞かせ活動が日中に集中するため、研修は以前、学生や若者世代も参加できるよう夜に朗読講座を開講していた。しかし、「青

い鳥」会員の多くが高齢で日中の開講を望んだため、現在は平日午前が開講している。そのため、活動そのものと研修時間が重複してしまったり、講座受講者の年齢層に偏りが出てしまい今後の大きな課題である。

(3) 感染症への対応

学校や幼児関連施設、多くの人が集まる商業施設等での活動が主なため、以前から感染症対策には気を配ってきた。読み聞かせは発声を伴うため、消毒やマスク着用はもちろん、フェイスガードやアクリル板等、効果的かつ読み聞かせに支障がない方法を模索しつつ実施してきた。しかし、コロナウイルス感染拡大に伴う休校や施設閉鎖が続き、活動・研修共に休止期間が長引いて会員同士の情報交換や交流が頻繁にできなくなった。休止期間を経て再開してもまた休止となったりを繰り返し、それぞれのイベント実施の確認や複数の読み聞かせ担当者への連絡に多大な時間と手間を要した。手分けをして連絡をとり合ったが、担当者の重複や確認漏れが出てしまい、再確認に更に手間がかかってしまうこともあった。また小学校の朝の読み聞かせ等、同時時間帯に活動場所が複数に分かれている場合、各学校・施設の対応指針や担当者も複数存在することから、依頼先と担当者双方が混乱してしまうことが多々あった。コロナやインフルエンザ等の感染症は今後も続くことが予想されるため、引き続き警戒して対応していかなければならない。

6 終わりに

「本のまち八戸」を標榜する八戸市での読み聞かせ活動は、「青い鳥」にとっても他の読み聞かせ団体にとっても今後益々盛んになっていくものと思われる。子どもにとっての読み聞かせは、その子の感性を磨く重要なもので、特に幼児期までの読み聞かせには、自然な文脈で言葉を学び、子どもを感情豊かにす

るというメリットがあるという。更に読み聞かせは親と子どもの本を通じたコミュニケーションなので、子どもだけでなく親にも変化を及ぼす可能性があり、幼児への読み聞かせを行った親の育児ストレスが減少したり、親の子どもの対するとらえ方が肯定的になりストレスを感じにくくなっていたことがわかっている⁽⁶⁾。

コロナの感染拡大で対話の機会が大幅に制限されてしまったからは、子どもの言語活動への影響が懸念される。そのため、今後も我々

大人が意識して子どもへの読み聞かせ活動を継続していけたらと思う。今後の継続的かつ効果的な活動に向けて、より活動内容や対象、開催日時等に関して吟味するとともに、発展可能な研修プログラムの一般向けの実施を検討していく必要がある。

子どもにとっても大人にとってもメリットが大きい読み聞かせ活動の益々の広がりを期待し、今後も「青い鳥」の活動を継続していきたい。

<参考文献および資料>

- (1)八戸市教育委員会 HP「地域密着型教育推進事業」
- (2)八戸ブックセンターHP「本のまち八戸とは」
- (3)八食センターHP「沿革」
- (4)八食センターHP「イベント」読み聞かせ劇場
- (5)NPO ブックスタート「全国の実施状況」
- (6)川島隆太・松崎泰「子どもたちに大切なことを脳科学が明かしました」

・執筆者紹介（所属）

三浦 文恵 八戸学院大学短期大学部介護福祉学科 教授